

「現地を訪問して想うこと」

1986年 経営学部卒 叶谷 裕一

2011年3月11日当日、私は仕事で茨城県の勝田に出張をしていました。JR常磐線の線路が地震により崩れたために東京に帰ることができず、停電、断水の小学校の体育館で地域住民の方と一晩を過ごしました。

人事勤労業務を担当していたため、東京に戻った後は従業員や従業員家族の安否確認と、計画停電のための就業日振替対応等慌ただしく過ぎてしまい、その後現地の状況に触れる機会を完全に逸していたところで今回の機会を知り、参加させていただきました。

南三陸で実際に現地に立ち、自分の目で被災した建物を見、語り部の方から当時の状況を直接うかがうことで、津波の高さ、津波の力の恐ろしさ等自分の想像をはるかに超えた出来事であったことを強く認識し、震災から1年8か月が経過したものの復興はなかなか進んでいないという現実を改めて考えさせられました。

また、OBの、株式会社ささ圭 佐々木社長ご夫妻の、被災当時の状況からかまぼこ工場復興までのお話は、家族の中での葛藤や様々な思いを直接聞くことができ、大変貴重で有意義なものでした。

この出来事を絶対に風化させてはならないと感じ、今後は自分にできることは何かを考えながら物事に関わっていきたいと考えています。

今回の東北応援ツアーに参加をして、改めて立命館を卒業し校友会という形でこのような機会を得ることができたことに大変感謝をしています。実際に現地を訪れて自分の目で見ることや、当時の話、今の状況を体験した人から直接聞くという機会は、個人レベルでは簡単に実現できることではありません。今後も継続されることを希望します。

最後に、このような機会を設けて頂いた事務局の方、宮城校友会の関係者の皆さんに改めて感謝を申し上げます。